

渋沢栄一 小諸講演演説全文

大正六年五月十五日於信州小諸



会長ならびに満堂の諸君、今日は当青年会の春季大会長並ニ満堂ノ諸君、今日ハ当青年会ノ春季大会ヲ開キニナリマスニ就イテ、私ニ参上いたして一場の所感を述べるようにという御相談を小テ一場ノ所感ヲ述ベルヤウニト云フ御相談ヲ小山(久左衛門)君の令息邦太郎君からこうお呼び立て、すなわ山君ノ令息国太郎君カラ蒙ツテ居リマシテ、則ち今日をとりまして参上いたして満堂諸君と御目チ今日ヲトシマシテ参上致シテ満堂諸君ト御目にかかると機会を得ましたのであります。

二懸ル機会ヲ得マシタノデアリマス、かかる(このような)盛大な会に参上いたしました事は誠に初スカル盛大な会ニ参上致シマシタコトハ誠に初めてでございますが、私はこの信濃の御国には古イシがらみを持って居りまして、当小諸町にも青年のころに度々参りました事がございます。そゆう(昔訪れた)ノ比ヒ度々参リマシタ事ノゴザイマス、曾遊ノ地ト云フヨリモ、むしろ第二の故郷という程に思フのでございます。

併シソレハ六十年ノ以前ノ事デゴザイマスカラ、殆ド面目ヲ一変シマシテ、今朝モ小山君ノ家で古書ノ手鑑ヲ拝見致シマシタ時二百人一首がございまして、「松モ昔ノ友ナラナクニ」ガゴザイマシタガ、「松モ昔ノ友ナラナクニ」という言葉がありました。私の今日の境遇ハト云フ言葉ガアリマシタガ、私ノ今日ノ境遇ハ

引上に、あるいはその他に多くございますけれども、前にも申す通り、風景も土地もそのまま存して居りますが、その人は今や亡し。老人も或ル場合ニハ長生ヲシタノヲ喜ブト共ニ、また古い友達を亡くしましたのを悲しむという場合もないでございませぬ。

この信濃の国は、その昔からして一体の気風がいたつて純朴で、かつ他の地方に比較しますると、一切の風体が高尚であつて、ことごとくそうと申し上げることは出来ないかも知れませぬが、おおむね貧富のトハ出来ナイカモ知りマセヌガ、概シテ貧富ノ懸隔ノ少ない土地だといふことを承知して居りま

スル、今日ニ於テモ尚其旧態ヲ存シテ居ルヤウに拜見されますのは、誠に理想的な地方と申し上げてもよからうと思ひます。

ほとんど昔のお友達は松すら面影が無い、と思う位で殆ド昔ノオ友達ハ松スラ面影ガ無いト思フ位デございます。ましてや人であればなおさら。しかし右の様な古イシがらみをもって居ります御当地でございます

昔旅行する際には、私は農業の暇に藍玉を商売して居りました、御当地にも、なお南佐久ニモ、若クハ小県にも各地方を巡廻いたしましたして、取引上の友達も沢山ございました。多少文学を好

その他その当時御こうぎりを厚くしましたお方はあるいは取

富むわけにはいかぬ、その結果ある地方に大なる富者があると、そのきんぼうには必ずまたこれに反する貧しい者があつて貧富平均を得ぬといふことはとかくイ者ガアツテ貧富平均ヲ得ヌト云フコトハ兎角地方のならいであります。地方ノ慣ヒデアリマス、

そのはなはだしき懸隔が進んでいきますと、結局それは其甚ダシキ懸隔方進デ往キマス、結局ソレハ健康体デハアリマセヌノデ、人ノ身体ニシテモある一部分がいかにも発達して、ある部分がある一部分が如何ニモ発達シテ、或ル部分が極く貧弱であつたならば、かたわであると同様に、ク貧弱デアツタナラバ、片輪デアルト同様ニ、あまり「けんべい」が強く進みますと、必ずその国の余リ兼併ノ弊ガ強ク進ミマス、必ズ其国ノ健全を失うようになる。ゆえに理想的の地方とい健全ヲ失フヤウニナル、故ニ理想的ノ地方ト云フナラバ、成ル可ク貧富ノ平均スルヤウニアリたい。当長野県と申し上げてよろしいか、全体は知りませぬが、少なくとも佐久・小県地方などは、私がせきマセヌガ、少クモ佐久・小県地方ナドハ、私昔ねん旅行した際に左様な有様ダト云フコトヲ拝見して、今もなお、その旧態を有していることを喜ぶのシテ、今モ尚其旧態ヲ存シテ居ルコトヲ賀ブノデゴザイマス、

地方の物産としては種々なる物が数えられます地方ノ物産トシテハ種々ナル物ガ数ヘラレマス

位置と思わぬでよからうと考えます。これから先位置ト思ハヌデ好カラウト考ヘマス、是カラ先に進んでいく余地は、すこぶる多いように思います。ことニ進デ往ク余地ハ頗ル多イヤウニ思ヒマス、殊にアメリカは絹物の需要の多い国柄で、近頃はニ亜米利加ハ絹物ノ需要ノ多イ国柄デ、近頃ハことにその富の増すと同時にその需要もまたいささか繁盛に殊ニ其富ノ増スト同時ニ其需要モ亦頗ル繁盛ニ相成ツテ居るようによります。もつとも原料の供給地はただ単に日本ばかりをもつて喜んでゐる訳にはいかぬ、隣り国すなわち中国の養蚕は中々に悔り難イ力を持つております。第一に桑園の地味がすこぶるカラ有ツテ居リマス、第一ニ桑園ノ地味ガ頗ルよろしい、また繭のみかけは日本の品と較べまする宜シイ、又繭ノ見掛ケハ日本ノ品ト較ベマスルと見劣りがいたすようでありますけれども、糸ノト見劣リガ致スヤウデアリマスケレドモ、糸ノ質が大変よろしいものであります。質ガ大変宜シイサウデアリマス、

昨日も純水館で白いの、黄いの、兩種の青島(ちんとう)の物を一覧しましたが、わざいすでに日本のよりは糸のヲ一覽シマシタガ、業ニ既ニ日本ノヨリハ糸ノ質ニ於テハ上位ニ居るといふお話しでございました。しかし青島(ちんとう)は中国における養蚕地の最も優シタ、併シ青島ハ支那ニ於ケル養蚕地ノ最モ優良ノ場所チヤゴザイマセヌ、養蚕地ノ極ク主なる所は江蘇・浙江ガ最も盛んでございます。ル所ハ江蘇・浙江ガ最モ盛デゴザイマス、

るが、特に養蚕に属する、あるいは蚕児の種、もしくはルガ、特ニ養蚕ニ属スル、或ハ蚕児ノ種、若クハ蚕糸此等ハモウ第一ニ指ヲ折ルベキ物デ、長野県下の蚕糸はほとんど日本の全国に冠たる、いな東野県下ノ蚕糸ハ殆ド日本ノ全国ニ冠タル、否東洋に冠たる——日本の製糸産額がほとんど世界の半額以上に相成つてゐる、その中の主たるものは長野県にある。もつとも諏訪地方の製糸家が、ただ単にその野県ニ在ル、尤モ諏訪地方ノ製糸家ガ唯単ニ其地方のみならず、各地ニ出張所ヲ設ケテ、其地方ノ繭を買取り、製糸ヲスルノガ尚諏訪ノ名ニ依ツテ輸出されるかも知りませぬけれども、二角ニ日本ノ最モ特産物ト申ス可キ蚕糸ニ於テハ、すこぶる優等の地位を占めて居るのは当県である、頗ル優等ノ地位ヲ占メテ居ルノハ当県デアルト申シテ好イノデアリマス、

小諸町のごときも、昨日純水館の製糸場をごく概略小諸町ノ如キモ昨日純水館ノ製糸場ヲ極ク概略に見しました、實に總ての設備がよく届いて、拝見シマシタガ、實ニ總テノ設備ガ好ク届イテ、かねて承り居った名にあいかなつて、敬服いたして予テ承リ居ツタ名ニ相副フテ、敬服致シテ拝見ヲ致シマシタノデアリマス、

併シ此蚕糸ノ事業ハまだ単に今日ヲ以テ満足ノ

私は四年前に中国の旅行をいたしまして、彼の地私ハ四年前ニ支那ノ旅行ヲ致シマシテ、彼ノ地の桑園を視て、實に悔り難いという感じを持ちまノ桑園ヲ視テ實ニ悔り難イト云フ感ジヲ持チマシテ、(その後)中国の蚕業に対して、我が製糸家は最も注目すべきものであるという事を、現に純水館主ノ小山(久左衛門)君、またその令息の邦太郎君にも度々お話しをいたしましたけれども、その他の諏訪のお方、若クハ横浜ノ生糸ヲ取扱ヒマスル委託販売商店、殊ニ蚕糸ニ対シテ大日本蚕糸会ト云フ一ツの法人団体が組み立てられまして、その会頭は子爵清浦奎吾君が任じて居られますが、この会に向かつてもしきりに愚見を呈して、今や追々中国の養蚕ニ対シテ御当地の方々、現に小山君などもその御一人である、諏訪に在る人、あるいは横浜の前に申した委託販売商店などで種々今研究中でございますので、果していかなる方法がここに案出されまますか存じませぬ、が、ただ私のみが案じレマスカ存ジマセヌガ、唯我レノミヲ以テ安んゼズ、一步進デ支那地方ノ蚕糸ニ対シテモ何分の経営ヲ為シテ、兩國ノ製糸ガ相反シ相衝突スルコトノナイヤウニシテ、俱ニ与ニ進ムヤウニ

させたいという考えを諸君が持つて居られます。サセタイト云フ考ヘテ諸君が有ツテ居ラレマスル、

私はそれに対して良い智恵を与へる事は出来ません。私ハソレニ対シテ良イ智恵ヲ与ヘル事ハ出来ませぬけれども中国を一覧して来たという縁故もセヌケレドモ支那ヲ一覽シテ来タト云フ縁故もありますし、また従来蚕糸業に対しては学術上のアリマスシ、又従来蚕糸業ニ対シテハ学術上の智識ハ持つて居りませぬけれども、実験上から申すと青年の頃にさんじを養う事を努めました申スト青年ノ頃ニ蚕兒ヲ養フ事ヲ努メマシタシ、壮年に至つては製糸ニ対シテ相当ニ力ヲ添シ、壮年ニ至ツテハ製糸ニ対シテ相当ニ力ヲ添えまして、昔風の坐繰(ごぐり)取りの糸では決して立派なヘマシテ、昔風ノ坐繰取ノ糸デハ決シテ立派ナ糸ガ出来ナイ、ヨーロッパ・アメリカに充分生糸を販売する事は出来ない、やはり等しく西洋式の販売スル事ハ出来ナイ、矢張り等しく西洋式の製糸法をやらねばいかぬというので、明治三年と覚えております、富岡の製糸場を、大蔵省ニト覚ヘテ居リマス、富岡ノ製糸場ヲ、大蔵省ニ勤務中起サセマシテ、爾来機械取ノ製糸ガ段々繁昌シテ今日に至つたのでございます。

これら工業につきましてもいささか微力を入れたつもりでございませぬ。更に銀行業者と相成つて、ソレデゴザイマス、更に銀行業者ト相成ツテ、ソレ此等工業ニ就キマシテモ聊カ微力ヲ入レタ積リでございませぬ。さらに銀行業者ト相成つて、ソレデゴザイマス、更に銀行業者ト相成ツテ、ソレ

家の事業もまた発展をいたしませぬ。かくのごとく農家ノ事業モ亦発展ヲ致シマセヌ、斯クノ如ク農工商と相まつて始めて蚕糸事業が完備をいたすの工商ト相俟ツテ始メテ蚕糸事業ガ完備ヲ致スノでございませぬ。デゴザイマス、前にも申し上げますとおり、御当地ナドノ養蚕ニ、製糸は、こんなな発展はしましたけれども、まだまだなかになかに進むべき余地は沢山ある。また外国特ニア中々ニ進ムベキ余地ハ沢山アル、又外国特ニ亜メリカと申してよろしうございますが、近頃はその他のインドなどにも絹物が沢山輸出されるような有様印度ナドニモ絹物ガ沢山輸出サレルヤウナ有様に進んでまいりましたように見えます。なるべく二進デ参リマシタヤウニ見エマスル、成ル可ク値を高クせず、品物を精製して、向フノ好みに応ずるよう売り出し得る事が出来ました。なミニ応ズルヤウニ売シ得ル事ガ出来マシタナラバ、例えば横浜の輸出高が昨年は四十万に近イ梱数を出したのを、更に一割二割を年々に増シテ往ク事ハ甚ダ難クナイ仕事だらうと思ひます。

あわせてこの養蚕事業は実に当国が最も首脳ノ位置に御座つて、全国みな長野県を視て経営すると申ス。二御座ツテ、全国皆長野県ニ視テ経営スルト申

以来は今の飼育法とか、製糸法とかの、すなわち農工の方は考えませぬけれども、今度は商いの側から、蚕糸に対して相当な御力添えをいたしたのでございませぬ。なぜならば、いかに農家で充分の飼育をいたして蚕兒が出来上がりまして繭になつて育ヲ致シテ蚕兒ガ出来上リマシテ繭ニナツテモ、工務が進んでこれを良い生糸にして売り出す方法が出来なければ、その農家の養蚕が發展する訳にガ出来ナケレバ、其農家ノ養蚕ガ發展スル訳ニハ参リマセヌ、

しかし、たとえ製糸家が西洋式の製糸機械を備へ付併シ縦令製糸家ガ西洋式ノ製糸機械ヲ備ヘ付ケ、多数の繭を仕入れて製糸をいたしますといつても、自然に出来るものではない。繭も買わねばならず、出来た糸も売らねばならず、この売買の間には第一に必要なのは金融でありませぬ。ノ間ニハ第一ニ必要ナモノハ金融デアリマス、此金融ガ此製糸ニ対シテ極ク簡便ニ且ツ其割合ガ低廉ニ得ル事ガ出来ませぬ。製糸事業の發展ハ出来ないのでございませぬ。ここに至ると商の勤ハ出来ナイノデゴザイマス、茲ニ至ルト商ノ勤めである金融家がこれに對シテ貪ラズ疑ハズ、メデアル、金融家が是ニ對シテ貪ラズ疑ハズ、よく信じ、よく取扱つて金融をなさぬと、製糸能ク信じ、能ク取扱ツテ金融ヲ為サヌト、製糸

しても宜しいのでございませぬ。この点についてハ諸君が充分他の地方に向つて誇りとなさるだけケノ位置ヲ御占メナサツテ御座ルノデアリマス、ケレドモ此名譽ハ必ずその自家ノ責任ニ依ツテいつまでも保てるものであるのか、名譽と責任とはちやうどなえる繩のごときもので、ひとり名譽ばかりで走る訳にいかぬ、責任ばかりが残るものでもありません。セヌ、

名譽があるとは必ず責任が存る。その責任をつかさぬと名譽は段々に無くなつてしまふ、ゆえに長野ヌト名譽ハ段々ニナクナツテ仕舞フ、故ニ長野県下の養蚕製糸家が前に述ぶるごとく日本ニ冠タル今日、もし皆様がおこたつて養蚕もはなはだ不完全であり、製糸ガ拙劣ニ陥ル、割合ハ高いケレドモ品物は悪いといふことであつたらもうどうも長野県ノ製糸ハ困ツタモノダト、必ず反対ノ譏リヲ受クルコトハ皆様ノ勤惰ニ因リ生ズルト云フコトハ、常に御覚悟ナサルヤウニ願ヒたいと思ひます。

ある一部分には文を含むと見ましてよからうと
或一部分ニハ文ヲ含ムト見マシテ宜カラウト
思ひマスル、デ如何ナル身分ニアリマシテモ、
農業にあれ、商業にあれ、あるいは工業にあれ、また
農業ニ在レ、商業ニ在レ、或ハ工業ニ在レ、又
はある会社等の事務に従事する場合、もしくは会
ハ或ル会社等ノ事務ニ従事スル場合、若クハ会
社等における総ての方面においておよそ自分の身を
社等ニ於ケル総テノ方面ニ於テ凡ソ自分ノ身ヲ
立てるに於いて、これから先かくしてこうありた
立テルニ就イテ、是カラ先斯クシテ斯ウアリタ
イト云フ考へハ相当ナ程度ニ於テハ我が理想ト
いうモノヲ有ツテ進むガ、青年が身を立って行
クニ就イテ必要条件とまで私は申し上げたいと思
ノデアリマス、若シは無クシテ唯成行ニノミ委
行くという事は、すなわち無目的の働きになり
シテ往クト云フ事ハ、即チ無目的ノ働キニナリ
ますから、必ずや自分の発達を為し得られぬも
マスカラ、必ずや自分ノ発達ヲ為シ得ラレヌモ
のと申しても過言ではなからうと考えます。
ノト申シテモ過言デハナカラウト考へマス、

私自身の事をここにお話しするもはなはだ余談のよう
私自身ノ事ヲ茲ニオ話しスルモ甚ダ余談ノヤウ
になりませんが、私は青年ころに自分の故郷に居
ニナリマスガ、私ハ青年ノ比ヒ自分ノ故郷ニ居
ります時には、やはり農業にもつばら力を尽して、
リマス時ニハ、矢張り農業ニ専ラカラ尽シテ、
自家の商売を満足させたいというのが理想で
自家ノ商売ヲ満足サセタイト云フノガ理想デゴ
ざいました。しかるにこの理想が変化しましたのは、
ザイマシタ、然ルニ此理想ガ変化シマシタノハ、

く送るものではなからう、なお老後数年の間たり
ク送ルモノデハナカラウ、尚老後数年ノ間タリ
とも、今度は何か精神界の一般に、その改良に
トモ、今度ハ何カ精神界ノ一般ニ、其改良ニデ
も力を尽くしたいと、こういう考えから、今日はも
モ力ヲ尽シタイト斯ウ云フ考へカラ、今日ハモ
ウ残年はなはだ短かくはございますけれども、その理
想をもつて、これは倒れて止むまでの考えで居るので
想ヲ以テ、是ハ殫レテ止ム迄ノ考ヘデ居ルノデ
ございます。
ゴザイマス、

私は銀行を辞します時にしきりに皆に申しまし
私ハ銀行ヲ辞シマス時ニ、頻リニ皆ニ申シマシ
て、ある職責は辞表でもつて辞める事が出来るけ
テ或ル職責ハ辞表デ以テ罷メル事ガ出来ルケレ
ども、国民たる務めは辞表を出す事が出来ない
ドモ、国民タル務メハ辞表ヲ出ス事ガ出来ナイ
(拍手起る)ゆえにこの満堂の諸君もある仕事につ
いては、嫌だと思えば辞表を出せませんが、国
民たる務めは私と同じように誰も書面を出して
民タル務メハ私ト同じように誰も書面ヲ出シテ
国民を止めるという事は御出来にはなさらな
国民ヲ止メルト云フコトハ御出来ニハナサラナ
い。必ずこの事を前提として、こういう時代にこ
イ、必ず此事ヲ前提トシテ、斯ウ云フ時代ニ斯
ういう事をして行きたい、ある事をうんぬんしたい
ウ云フ事ヲシテ往キタイ、或ル事ヲ云々シタイ
と思ひましても、必ずこれを遂げ得るものでもご
ト思ヒマシテモ、必ず之ヲ遂ゲ得ルモノデモゴ
ざいませぬけれども、ぜひ我が目的を立てその目
ザイマセヌケレドモ、是非我が目的ヲ立テ其目
的によつて進んで行くという事は、ことに青年のお
的ニ依ツテ進デ往クト云フ事ハ、殊ニ青年ノオ

世の中のやむを得ざる時勢が私の理想として変
世ノ中ノ已ムヲ得ザル時勢ガ私ノ理想ヲシテ変
化せしめたと申してもよからうと考えます。ちよう
化セシメタト申シテモ好カラウト考へマス、恰
ど幕府の末、外寇が起り、政治がはなはだよろしきを
度幕府ノ末、外寇ノ起リ、政治ノ甚ダ宜シキヲ
失つた有様であつて、私どものごとき地位もなし、
失ツタ有様デアツテ、私共ノ如キ位置モナシ、
学問もなし、格別得たところもありませぬけれども、
学問モナシ、格別得タところもありませぬけれども、
学問モナシ、格別得タ処モアリマセヌケレドモ、
いわゆる国を憂ふるの觀念から遂に最初立てました
所謂国ヲ憂フルノ觀念カラ遂ニ最初立テマシタ
理想ガ變ジテ、いわゆる浪人社会ニ出テ世ノ弊ヲ救
おうというような氣を起しました。しかしこれは私
ハウト云フヤウナ氣ヲ起シマシタ、併シは私
の思い違いでありましたが、これもやはり理想ノ
ノ思ヒ違イデアリマシタガ、是モ矢張り理想ノ
一つではあつたのであります。理想によつて進
一ツデハアツタノデアリマス、理想ニ依ツテ進
マントシタノデアリマス、

ついに變化して、色々になつて、明治六年にはま
遂ニ變化シテ、色々ニ變ツテ、明治六年ニハ復
た元ノ実業界ノ人ニ變化シマシテ、廻リ廻ツテ
タ元ノ実業界ノ人ニ變化シマシテ、廻リ廻ツテ
元へ戻つたような有様で、その後四十年せひその事
元へ戻ツタヤウナ有様デ、爾來四十年是非其事
を遂げたいと考へまして、あえて遂げ得たものと
ヲ遂ゲタイト考へマシテ、敢テ遂ゲ得タモノト
ハ申されませぬけれども、しかし自分の思つた理
ハ申サレマセヌケレドモ、併シ自分ノ思フタ理
想ガ稍達シ得タト存じます為に、もうすでにか
想ガ稍達シ得タト存ジマスル為ニ、モウ既ニ斯
ク老衰シテ、実業界ニ充分生産殖利ニ一生ヲ全

方々の世に身を置く事においてはなはだ必要な、またその世に
方々ノ世ニ処スルニ於テ甚ダ必要ナ、又其世ニ
身を置く事において便利なるものである、こう考えたが
処スルニ於テ便利ナモノデアル、斯ウ考へタガ
こうなつたという事は、数年の間には段々わかっ
斯ウナツタト云フ事ハ、数年ノ間ニハ段々わか
テ来るものでございます。
テ来ルモノデゴザイマス、

もしそれがわからぬならば、それはあるいは己の志
若シソレガ分ラヌナラバ、ソレハ或ハ己レノ志
ガ變ジテ、立てた目的通りヲ遂ゲヌト云フコト
デアレバ、是ハ決して其効果を奏するものでは
ない。いかにとなれば効果を奏せぬように自分で
ナイ、奈何トナレバ効果ヲ奏セヌヤウニ自分で
なさるのであるから、これは自分が自分の目的を
為サルノデアルカラ、是ハ自分ガ自分ノ目的ヲ
棄テタ以上ハ決してその目的が達し得られるもの
ではありませぬ。
デハアリマセヌ、

けれども、もしこれを懸命に貫徹せしめたならば必
ケレドモ若シ之ヲ懸命ニ貫徹セシメタナラバ必
ずその効果が見えるものである。木を植えて育て
ズ其効果が見エルモノデアル、木ヲ植エテ育て
るので、種子ヲ蒔イテ畑ヲ耕スノデモ、やは
ルノデモ、種子ヲ蒔イテ畑ヲ耕スノデモ、矢張
りこれも人の理想・目的によつてその事が効ヲ奏シ
リ是モ人ノ理想・目的ニ依ツテ其事ガ効ヲ奏シ
て来るのでありますから、大と小の差はござい
テ来ルノデアリマスカラ、大ト小ノ差ハゴザイ
ますけれども、人には必ず理想はなければなら
マスケレドモ、人ニハ必ず理想ハナケレバナラ

ぬものである。しかしこの理想がただ単に人たる者ヌモノデアル、而シテ此理想が唯単二人タル者は自己のみの利をもつて理想とすることは、事にハ自己ノミノ利ヲ以テ理想トスルコトハ、事ニよるとかえつて自らの利益しか得られぬものである。およ依ルト却テ自ラ利益シ得ラレヌモノデアル、凡そ人たる者は独りで世の中に立つものではない。必ず共同的の者である。相群れをなし、相共イ、必ず共同的ノ者デアル、相群ヲ成シ、相共に達するでなければ、決して小さい社会もお成り立つものではない。ましてや大なる国家で立ツモノデハアリマセヌ、況ヤ大ナル国家ニあればなおさら。

於テオヤ、
まあごく近い例を申しますと、私はふだんにもマア極ク近い例ヲ申シマスルト、私ハ普断ニモ自分で銀行業者の寄り合いにも申しましたが、銀行ノ如キ商売ハ自分ノ資本で自分で経営する、自己だけで資本が沢山あれば繁昌する、発達ガ自己ダケデ資本ガ沢山アレバ繁昌スル、発達ガ出来るかのように思うかもしれないが、これは大きな誤解でありませぬ。銀行家のごときは他の相たすけを受けて初めて商売の出来るものである。その周囲すなわケテ初メテ商売ノ出来ルモノデアル、其周囲即ち御得意が益々繁昌せねば決して銀行が繁昌するものではない。例えば農業ヲ視テモサウデス、ルモノデハナイ、例へば農業ヲ視テモサウデス、自己の耕作物が、他の商売が繁昌し、他の工業自己ノ耕作物が、他ノ商売ガ繁昌シ、他ノ工業

事が結局自己のためをはかる訳に相成る。私はコトガ結局自己ノ為メヲ凶ル訳ニ相成ル、私ハふだん道德と経済とは必ず一致すること、普断道德ト経済トハ必ず一致スルト云フコトヲ主義として居ります。銀行業者などはとかく道德主義トシテ居リマス、銀行業者ナドハ兎角道德的ノ経営ハ出来得まじきものごとく、昔カラ言いならされて、悪ク申せば高利貸にもなる、こうヒ做サレテ、悪ク申せば高利貸ニモナル、斯ウいう性質ノ業態ニ必ず道德ト経済トが一致スル云フ性質ノ業態ニ必ず道德ト経済トガ一致スルト云フコトヲ申しましたが、従来ノ有様カラ言うと、あまりうえんな、高尚な説を言う人ニラ言フト、余リ迂遠ナ、高尚ナ説ヲ言フト人ニ評サレタ位でございまして、しかし長い経営カラ自身で考えて見ますと、決してそれが過つておらぬ、はたして人のためを思う経営が必ず自テ居ラヌ、果シテ人ノ為メヲ思フ経営ガ必ず自家ノしあわせをなして来るといふことは、事実において明らかであります。ゆえにまず立てる理想の中に、テ明カデアリマス、故ニ先ヅ立テル理想ノ中ニ、必ず理想というものは自己ノ利益のみを第一とせぬ理想というものが最も肝要であるといふこと、セヌ理想ト云フモノガ最モ肝要デアルト云フコトを、理想を立てると同時に覚悟いたしたいと思フのであります。

第二に申したいのは、青年は——とばかりではあ第二ニ申シタイノハ、青年ハ——ト許リデハア

が進歩してよく売れるにおいて、初めてその農業ノガ進歩シテ能ク売レルニ於テ、初メテ其農業ノ利益を生ずる。すべて世の中は相持つて進んで行く利益ヲ生ズル、凡テ世ノ中ハ相持ツテ進デ往クものであります。ゆえに仏法は四つの恩の中に衆モノデアリマス、故ニ仏法ハ四ツノ恩ノ中ニ衆生ノ恩というものを数え入れてあります。くらしいに、生ノ恩ト云フモノヲ数ヘ入レテアリマス位ニ、どうしても人は孤生するものではない。何ウシテモ人ハ孤生スルモノデハアリマセヌ、独りで育ち生きていくものではない。此道理想から考えてみても、理想というものはただ自己ノ幸福自己ノ便宜のみを理想とすべきもので己ノ幸福自己ノ便宜ノミヲ理想トスベキモノデハアリマセヌ、又ソレデハ決シテ其自身ニモ完全ニ発達シ得るものではないと申すことは、ほとんど明らかかな事だと思ひます。

ゆえにこの人たるもの、まず第一に立てる理想、其故ニ此人タルモノ、先ヅ第一ニ立ツル理想、其理想ノ重要ナ所ハ必ず自己ノ利益ノみでなしに、あるいは地方にあらばその地方ノ幸福、広ク言へば国家、第一に他愛の心を理想といたして進んで行くという事が最も必要だらうと思ひます。

くト云フ事が最も必要だらうと思ひます、
しこうして必ず他を愛する、他のためをはかるという而シテ必ず他ヲ愛スル、他ノ為メヲ凶ルト云フリマセヌ、是モ総テノ人ニ対シテ申シテ良イノでありませぬ、これはもすべての人に対して申して良いのであります。其時代ヲ能ク知ルト云フコトヲ、これがはなはだ肝要でございませぬ。その時はどういう時であるかということをつまびらかに知る、むずかしいデアアルカト云フコトヲ詳カニ知ル、ムヅカシイ言葉で申すと「哲人機ヲ知ル之ヲ思ヒニ誠ニス」といふ句がありませぬ、機ヲ知ルト云フコトハすなわちその時期を察するのであります。時代ト云即チ其時期ヲ察スルノデアリマシテ、時代ト云フモノハ追々ニ変化シテ往クモノデアリマス、

いつも同じ有様ではおりませぬ。これは人が団子何時モ同じ有様デハ居リマセヌ、是ハ人ガ団子ヲ食ベルト彼岸ダト思フ、牡丹餅ヲ食ベルト盆ダト思フト云フダケノ唯心無シニ経過スルト云フことは、これは機を知るのではないのであります。時代の变化をよく察知するといふことは、広い言葉で言うとは、すなわち天下を計略するにも機ヲ知ラネバ往カヌガ、又極ク小さい言葉で言うト、麦ヲ蒔クニモ時ヲ知らなければならぬ、蚕児ヲ養フニモ八十八夜モ来タカラ種子ガ青ンデ来タト云フ考ヘヲ持タナケレバナラヌ、此日常

の場合に時を知るといふ必要がありませんが、私
ノ場合ニ時ヲ知ルト云フ必要ガアリマスガ、私
はただ時計を見て時を知れ、時間を知れといふの
ハ唯時計ヲ見テ時ヲ知レ、時間ヲ知レト云フノ
ではないのであります。

今ノ時代ハ何ウ云フ有様デアるかといふ事は、
大なり小なり總ての方面によくこれを注意せねば
大ナリ小ナリ総テノ方面ニ能ク之ヲ注意セネバ
ならぬものでございます。お集まりの皆様ノ多
ナラヌモノデゴザイマス、御集まりノ皆様ノ多
クハ実業界ノ諸君デオ出デなされるだろうと思ひ
ますが、日本ノ実業ノ変化ノ有様ヲ茲ニ概略申
上ルと、御維新ノ初めと今日とは実ニ大なる変
化をなしております。商業工業においてはヨーロッパ・
アメリカノ風習を学ぶように相成りまして、まった
ク時代ガ変化致シタト申シテモ宜イノデアリマ
ス、此世ノ中ニ事業ヲ経営スル時ニハ、是非此
時代ハ何ウ云フ時カト云フコトヲ知ツテ、ソレ
ニ応ズルヤウニシテ働ラク、サウセザレバ必ズ
其宜シキヲ得ル事ハ出来ませぬものでございま
す。

ものであるといふことを覚悟せねばならぬので
モノデアルト云フコトヲ覚悟セネバナラヌノデ
ス、戦争ノ終息した暁はどういふ有様に變化し
て来るかといふ事が今日において大に注意せね
テ来ルカト云フコトガ今日ニ於テ大ニ注意セネ
バナラヌ、即チ現在ノ輸出入ノ順調ニナルトカ、
或ハ正貨ガ沢山ニアルトカ、品物ガ沢山ニ高ク
売レルトカ云フ喜びハ、いかに變化するかとい
ふ事をどうしても今日覚悟せねばならぬ時代に
フ事ヲ何ウシテモ今日覚悟セネバナラヌ時代ニ
相成ツテ居リマス、独り今ノ戦争関係ノ時機ヲ
觀察スルばかりではありませぬ。他の事物につ
てもすべて時代によく応ずるような考えを持ちま
せぬと、たとえよい理想を持っておつても、その理
想が首尾良くいきませぬとか、あるいは大なる過
ヲ生ズルト云フ事ガアルモノデアリマス、

ゆえに青年の世に立つには第一に理想を立てる事
故ニ青年ノ世ニ立ツニハ第一ニ理想ヲ立テル事
ガ必要、第二ニ其時機ヲ知ルノガ必要だといふ
ことが最も御注意なさるべきものと考へます。

更ニ今一ツ私ハ青年ノ諸君ニ最も重要な事をここ
更ニ今一ツ私ハ青年ノ諸君ニ最も重要な事をここ

ゆえに若いお方の今の理想をもつて世に立つには、
故ニ若イオ方ノ今ノ理想ヲ以テ世ニ立ツニハ、
どうしても今の時代がいかなる時代であるかと
何ウシテモ今ノ時代ガ如何ナル時代デアるか
といふことを知るのが最も肝要である。しこうして今
云フコトヲ知ルノガ最も肝要デア、而シテ今
日ハどういふ時代であるかといふと、これは最も
喜ぶべき、又憂フべき時代ニ在ルト云フコトヲ
諸君ハ、御記憶アリタイト思ヒマス、其喜ぶべ
きわけはどうかといふと、このヨーロッパの大戦乱ハ従
来ノ日本ノ段々欧米ニ学んで工業・商売ノ進歩
来ノ日本ノ段々欧米ニ学んで工業・商売ノ進歩
して来た、彼等の盛んな時にはこの方が進もうとす
シテ来タ、彼等ノ盛ナ時ニハ此方ガ進モウトス
ると、向こうから押しこくつて来て彼等と相闘ツテ
ルト、向フカラ押コクツテ来テ彼等ト相闘ツテ
居ツタノガ、彼ニ不幸我レニ幸ヒ、向フガ戦争
のために商工業ノ進歩ハ停滞シテ参ツタ処カラシ
ノ為ニ商工業ノ進歩ハ停滞シテ参ツタ処カラシ
テ、甚ダ有様ガ変化シテ、始終輸入ニ憂ヒテ居
つた日本ガ輸出勝ちになり、各種ノ工業モむしろヨー
ロッパに輸出するように進んで参りました。

まあこの事についてある種類には実に意外なる、
マア此事ニ就イテ或ル種類ニハ実ニ意外ナル、
利益ヲ得テ喜びをもつて迎えている人が多いう
でございませぬ。さりながらこれは必ずまた變化する
デゴザイマス、去リナガラ是ハ必ズ又變化スル

に申し上げて置きたいと思ふのは、すなわち言行が一致
ニ申上ゲテ置キタイト思フノハ即チ言行ガ一致
スルト云フコトデアリマス、言フ事ト行フ事ガ
必ず一致するので。言フハ易クシテ行フハ難
シといふことは、昔カラ人ノ訓ヘテ居ル処デゴ
ザイマスケレドモ、ソレハ今日デモ尚其通り、
孔子ノ教えにも「言に訥(とつ)にして行に敏ならん事
ヲ欲す」なるだけ言議は少くして実行のあがる
ように心掛けたいと教えられております。けれ
ども人はただ言議を少なくと言つても唾(おし)で暮す訳に
ハ参リませぬ。

志といふものは始終自分で言い、現すだけの力
志ト云フモノハ始終自分デ言ヒ現ハスダケノ力
をもたねばならぬ、すなわち言葉ははなはだ大切である。
ヲ有タネバナラヌ、即チ言葉ハ甚ダ大切デア、
その言葉を発するにはもちろん意があつて発するの
其言葉ヲ発スルニハ勿論意ガアツテ発スルノ
で、志である。志を發するのは言葉で、言葉を
行フのは実行である。この言行が一つでなければ
決して効果を奏するものでもなし、また人として
他の信用を得るものでもない。事業ノ経営成功
も決してよくし得るものではないと申し上げても
モ決してよくし得るものではないと申し上げても

過言ではないと思ひます。およそ人の世に尊ぶ処
過言デハナイト思ヒマス、凡ソ人ノ世ニ尊ブ処
は、どうしても信用であります。あの人は信用
ハ、何ウシテモ信用デアリマス、アノ人ハ信用
がある、人格の高い人だと人に賞讃される人は、
ガアル、人格ノ高い人ダト人ニ賞讃サレル人ハ、
よく御觀察なさいませ。必ず言行が一致である。
能ク御觀察ナサイマセ、必ず言行ガ一致デアル、
もし言行を齟齬する人でありましたならば、そ
若シ言行ヲ齟齬スル人デアリマシタナラバ、ソ
レデ信用のあるという人はほとんど見ることの得ら
れざる訳であります、
レザル訳デアリマス、

優れた英雄豪傑中にはあるいは言う程に行わぬ人が、
優レタ英雄豪傑中ニハ或ハ言フ程ニ行ハヌ人が、
必ずないとは申しませぬけれども、けだし（思うに）その言行
必ズナイトハ申シマセヌケレドモ、蓋シ其言行
がはなはだ合しませぬと、いかに偉人であつても、
ガ甚ダ合シマセヌト、如何ニ偉人デアツテモ、
信用という点からは多少欠くる処が生ずるのであ
信用ト云フ点カラハ多少欠ル処ガ生ズルノデア
ります。ゆえに言行を一つにすることが、私は青年
リマス、故ニ言行ヲ一ニスルコトガ、私ハ青年
の最も注意をせにやならぬ処と深く信ずるので
ノ最モ注意ヲセニヤナラヌ処ト深ク信ズルノデ
ございます。青年の諸君に対して私の希望いたし
ゴザイマス、青年ノ諸君ニ対シテ私ノ希望致シ
ますことは数々あらうと思ひます。しかしあまり多
マスコトハ数々アラウト思ヒマス、併シ余リ多
ク申上げる程時もございませぬし、またその事柄をも
ク申上ル程時モゴザイマセヌシ、又其事柄ヲモ
ここに考えをもちませぬ。ただ第一に、どうしても
茲ニ考ヘテ有チマセヌ、唯第一ニ、何ウシテモ
人となつては必ず一つの理想を持って世に進み
人トナツテハ必ズ一ツノ理想ヲ持ツテ世ニ進ミ

たい、しこうしてその進むや、その時代ヲ詳カニ知ル事ガ
必要である。またこれを知り、またこれを進むにおいて、言
必要デアル、又之ヲ知り、又之ヲ進ムニ於テ言
葉と行いと齟齬いたさぬようにするのが、はなはだその
葉ト行ヒト齟齬致サヌヤウニスルノガ、甚ダ其
人の世に發達する秘訣であります。ここをもつて
人ノ世ニ發達スルノ秘訣デアリマス、爰ヲ以テ
諸君は充分なる御注意あらんことを希望いたすの
諸君ハ充分ナル御注意アランコトヲ希望致スノ
でございます。
デゴザイマス、

はなはだ時間が迫つて参りましたので尚申し上たいよ
甚ダ時間が迫ツテ参リマシタデ尚申上ゲタイヤ
ウニ考ヘマスル事モゴザイマスケレドモ、唯要
点をここに申し述べてこれで今日は御免をこうむります
点ヲ茲ニ申述ベテ是デ今日ハ御免ヲ蒙リマス
（拍手起る）
（拍手起ル）